審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文は大岡昇平の６作品、すなわち、「俘虜記」「母」「黒髪」「花影」「母六夜」「ハムレット日記」の各作品を、文体及び〈語り〉を中心に据えて仔細に論じ、最終的には文学と教育との接点を見出そうとした野心的論考である。大岡昇平の作品は「俘虜記」と「野火」を中心に、教材としてはこれまで戦争を題材としたものばかりが取り上げられてきたのだが、その扱い方の一部に偏りがあり、本論文では論じる対象を戦争物以外にも広げて、既成の論理性や合理性にばかりに焦点を当てた読みや、特定のイデオロギーに支配された読みからできるかぎり自由であろうとする立場から、それらを再度丁寧に読み込み、文学的特徴と教材的価値とを見極めようと試みている。

大岡テクストを取り上げる論者の多くが得てして教材的価値には無関心であり、また、教材としての大岡作品を論じたものの大半が、そこに反戦思想などといった比較的型に嵌ったテーマを見出して安心してきたことを考えれば、本論文の目的はそれら固定化された読みに揺さぶりをかけるという意味できわめて斬新かつ意義深いと考えられる。

また、明晰だとか合理的だとかいわれ続けてきた大岡文学の中心に、それらとは別にアンビヴァレントな感情の葛藤状態が潜んでいるという発見を中心に据えた分析経過は肌理細かく独創性もあって、今後の大岡の文学研究と教育に一石を投じる貴重な成果を挙げているといえる。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文の研究の方法はかつてテクスト論などと呼ばれた、小説と、作者や社会などその外部とを厳密に切り離して、書かれた文字のみを克明に追い、そこに多彩な意味を見出していくというごくオーソドックスなもので、当然妥当といえるが、本論文の執筆者はさらにナラトロジーの主概念である〈語り〉の分析法を援用して、大岡テクストの〈語り〉の中に、語るものと語られるものとの相互干渉が潜んでいて、それが一つの魅力を生み出していると論じているのだが、これもまたきわめて繊細で明確な方法意識に裏付けられた説得力のある議論になっている。

さらに、近代文学研究の世界では、これまで父と息子の関係が中心化されて論じられてきた傾向があったのだが、本論文で取り上げられている母と娘、母と息子の関係についてはさほど掘り下げて考察されてこなかった面があり、その意味で、本論文で母が娘や息子に与える影響に着目して小説を読み解いたことは、それぞれのテクストの新たな一面を垣間見ることのできる貴重でかつ有効な方法であったと考えられる。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

国語教材研究や近代文学研究には当然さまざまな分析方法があり、なかには膨大な外部資料を要する研究も少なくないのだが、本論文ではそのような方法が取られていないため、テクスト以外にとりたてて多くの資料やデータは用いられていない。取り上げられている小説も「俘虜記」と「花影」を別にすれば比較的先行研究の少ないものばかりであり、その点、外部資料の扱いは比較的容易だし、また、実際適切に用いられているともいえる。ただ、教材としての「俘虜記」を論じた第一章については、その内容から、まだまだ多くの資料や授業の実践を示

したうえでの論議が必要だったはずで、若干残念といわざるをえない面もみられた。が、テクストそのものの扱いがきわめて繊細でよく考え抜かれており、それらの瑕瑾を概ね補って余りある展開になっていると判断した。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか。

様相の異なる６作品を母子関係を中心に論じて、それぞれに固有の「葛藤」が内包されていることを立証していった本論文の最終的な到着点は、ごくおおまかにいってしまえば、大岡テクストの魅力は、ただ明晰で分析的といったテクノロジカルな特徴にのみあるのではなく、揺らぐ〈語り〉等に込められたテクストとの「個別的・一回的」出会いにもあり、それこそが教材としての価値に通じていくもので、今後大岡文学のもう一つの特徴として読まれ続けていくべきものだということになるが、これまでの大岡評価の虚を衝いた感のあるこの結論は、一見ユニークに思えるものの、いわれてみれば同意できるところが多く、そこへ至るまでの手続きも見事で説得力があり、十分学術的な水準にも達していると考える。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文の最大の成果は、大岡昇平の文学テクストに従来の研究史の中では見逃されてきた新たな特質を見出し、教材的価値についても、これまで大岡教材の主流になっていた「俘虜記」等の戦争物以外に見るべき魅力があることを実証して具体的に提示してみせたところにある。たしかに大岡のレトリカルで一見合理的に思える文体は読む者を惹きつけるが、しかし、その背後にさまざまな仕組みによって隠蔽されてきたアンビヴァレントな思い、すなわち「葛藤」があったという指摘は鋭く、それを論理立てて説明していく過程を含め、大岡テクストの研究に新たな地平を切り拓いたということができる。その意味で、本論文の意義は大きいといわざるをえないが、重要なのはそれが、今後の教材開発においても生かし得るということであろう。大岡昇平といえば、中学校や高等学校の生徒たちの多くはこれまで接してきた「俘虜記」や「野火」などの戦争教材のイメージによって、おそらく戦争文学の書き手としか認識がないであろうが、じつは本論文でその一端が解き明かされたことによって、そのほかにもじつに多彩で豊かな文学世界を築いてきた作家で、貴重な教材の書き手でもあることが証明されたからである。本論文で展開されている〈語り〉や文体の分析の仕方等、多様かつ的確で手際のよい考察の方法なども、単に大岡テクストについてのみならず、今後の教材研究の在り方全般に間違いなく貴重な示唆を与えてくれるはずである。

以上の５点によって、５名の審査委員全会一致で本論文は東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士の学位（教育学）を授与するのにふさわしいと判定した。